

2015.10.3 朝日

神奈川の記憶

1 防火帯建築を歩く

横浜 復興象徴の街並み

耐火性高めた「立体的な町家」

県建築士会が17日に横浜の街並みを考えるシンポジウムを開く。だがそのテーマを聞いて、具体的イメージを描くことのできる人はどのくらいいるだろう。

防火帯建築――

シンポジウムで基調講演をする横浜国大の藤岡泰寛

准教授が説明してくれた。「横浜ならではの、あるいは最も横浜らしい街並みだといえるでしょう」

横浜の中心部、主に関内と関外地域に昭和30年代に建設されたという。



横浜の戦後復興を物語る吉田町の「防火帯建築」。エレベーターがないので4階建てで高さがそろっている。横浜市中央区

に面した長い建物といえは分かってもらえますかね。画廊やレストランが目立つ、あの建物です」



横浜ならではのものは戦後の歴史に由来するという。

戦争で焼け野原となった都市の復興に際し政府は耐火性を高めるため防火帯を設けることにした。具体化には三つの方策があった。①道路を広げる②公園を作る③建物を不燃化する。

東京や名古屋など他の大都市では復興の象徴として広い道路や大きな公園が計画された。ところが市中心部を米軍に接収された横浜では不可能だった。

1952年に耐火建築促進法が制定され、政府は補助制度を設けた。しだいに

朝鮮戦争が一段落し、米軍は不要の土地や建物を返還するようになった。

そこで横浜市が考えたのが耐火性の高い建物による防火帯の設置だった。

「そのまま放置すれば地主が好みに木造の建物をつくり、まったく違う街並みができたはずだ」と藤岡さんは指摘する。

街ににぎわいを取り戻すことも目指し、商業施設と住居を組み合わせたビルを共同で建設することを市は地主に呼びかけた。市独自の融資制度も設けた。区分所有権の概念がまだない時期なので権利関係が難しかったが知恵をこらした。

そうして出来たのが防火帯建築だった。大きなものは長さ80メートルを超える。住宅政策を専攻し京都の伝統的な町家を研究してきた藤岡さんが横浜国大に赴任したのは16年前。街を歩いていると目に驚いた。

「何て味のある建物だ。これは立体的な町家だ」

以来、調査、研究を続けてきた。共同ビルは約50棟作られ、20棟ほど残っているという。

「横浜の都市の記憶がある建物が継承されているんです。どう活用してゆかかが課題です」と藤岡さんは

問いかける。

シンポジウムは午後2時30分から、横浜情報文化センター（横浜・日本大通り）で、申し込みはメール（info@kanagawa-ken-tikuskikai.com）P.問い合わせは県建築士会（045・201・1284）。

今も残る代表例だという吉田町を初秋の1日歩いてみた。伊勢佐木町と野毛を結ぶ通り道で、街路樹を備えた長く低い建物はどこかヨーロッパの街のようだ。創業101年というせんべい店で店主の大場有造さん（80）に話を聞いた。「おやじたちが苦労して作って、23歳の時から住んでいるけど使いにくいよ。作り直すといったら賛成しないな。景気が悪いから、そんな話もないけどね」（渡辺登志）

身近な歴史をテーマにした企画を始めます。人に会い、街を歩き、本や資料を探し、博物館のぞき……この地に宿る様々な記憶をたどりながら足元の歴史に目を向けてみます。

土曜日の第2神奈川面に随時掲載します